

修士論文（要旨）

2014年1月

日本語学習意欲に影響を与える要因に関する質的研究

— タイ中部P大学の日本語主専攻者を対象に —

指導 宮副ウォン裕子 教授

言語教育研究科

日本語教育専攻

212J3018

富吉結花

目次

| | |
|-------------------------------------|----|
| 本稿で用いる重要術語の英日対訳表 | ① |
| 第1章 はじめに | 1 |
| 1.1 用語の定義 | 2 |
| 1.2 研究の背景と目的 | 2 |
| 1.3 本論文の構成 | 4 |
| 第2章 先行研究 | 5 |
| 2.1 第二言語習得における動機づけ研究の流れ | 5 |
| 2.2 学習意欲に関する先行研究概観 | 7 |
| 第3章 調査概要と分析方法 | 10 |
| 3.1 調査協力校の概要 | 10 |
| 3.2 調査概要 | 12 |
| 3.3 一次調査（質問紙調査） | 12 |
| 3.4 二次調査（インタビュー調査） | 13 |
| 3.5 分析の枠組み | 14 |
| 3.6 分析方法 | 16 |
| 第4章 一次調査の分析と考察 | 17 |
| 4.1 要因の分析結果 | 17 |
| 4.2 一次調査の総合的考察 | 22 |
| 第5章 二次調査の分析と考察 | 24 |
| 5.1 L2 Motivational Self System | 24 |
| 5.2 インタビュー調査の分析・考察 | 26 |
| 5.2.1 <実際使用場面での不満足感>と<友人> | 27 |
| 5.2.2 <先輩>の影響 | 30 |
| 5.2.3 <実際使用場面の経験>と教育文脈における学習の意味づけ | 32 |
| 5.2.4 既習者と未習者の混在 | 34 |
| 5.2.5 教育文脈におけるワークロード | 36 |
| 5.2.6 意欲が上がる授業・下がる授業 | 41 |
| 第6章 学習者の学習意欲を維持し高めるためのストラテジー | 46 |
| 6.1 4章と5章のまとめ | 46 |
| 6.2 学習者の学習意欲を維持し高めるためのストラテジー | 47 |
| 第7章 おわりに | 53 |
| 7.1 本研究のまとめ | 53 |
| 7.2 本研究の限界と今後の課題 | 54 |
| 謝辞 | |
| 参考文献 | |
| 巻末資料 | |

要旨

【キーワード】 学習意欲, 社会文化的文脈, L2 Motivational Self System, 相互作用, 意欲向上ストラテジー

本研究は、タイ中部 P 大学の日本語主専攻者を対象に、日本語学習意欲に影響を与える要因を明らかにし、意欲向上ストラテジーを探った質的研究である。本研究では「学習意欲」を「熱心に学習に取り組みたいと思う気持ち」と定義する。

言語教育の場において、学習意欲は教師・学習者双方にとって、常に大きな関心事の一つだといえる。学習意欲は、研究上では動機づけの研究とされている(磯田 2005)。動機づけは常に注目され、盛んに研究されてきた(小西 2006)が、近年その「対象」「手法」「視点」に関する問題点が指摘されている(守谷 2002, 小西 2006, 羅 2005)。よって本研究では、学習者の「学習意欲」を対象とし、質的手法を用いて学習者の考えを重視するとともに、社会文化的文脈の中に位置づけて分析・考察する。そして、教育実践上の応用方法を考えることを目的とする。研究課題(RQs)は 1) 学習者の学習意欲に影響を与える要因にはどのようなものがあるのか 2) それらの要因はどのように学習意欲の変化に影響しているのか 3) 教師として具体的にどのようなことをすれば、学習者の学習意欲を維持し高めることができるのか の3点である。

第二言語教育の動機づけ研究は、R.Gardner らによる社会心理学的な研究に始まり、教育心理学の視点を援用した研究へと広がってきた。近年では既存の要素と新しい要素を統合した、より広範にわたる新しい動機づけ概念も提案されている。また、動機づけに関わる種々の概念を整理した「動機構成概念の7つの局面」を枠組みに、学習継続要因を包括的に検討した質的研究(Shoaib & Dörnyei 2004, 岩本 2010)からは、要因は幅広い局面に存在することが明らかにされている。本研究でも「動機構成概念の7つの局面」を分析枠組みとし要因を包括的に捉えた上で、新しい動機づけ概念の一つである L2 Motivational Self System (Dörnyei 2009, 以下 L2-MSS) を援用して詳細な分析・考察を行った。

本研究の協力者は、P 大学の日本語主専攻の在校生・卒業生で、一次調査では在校生 66 名に自由記述式の質問紙調査を、二次調査では在校生・卒業生計 30 名に半構造化インタビューを行った。本稿では 66 名の質問紙調査回答と 1 から 3 年生 23 名のインタビューデータを分析対象とした。

質問紙調査の分析の結果、学習意欲に影響を与える要因は7つの局面全てに現れ、幅広い局面を視野に入れる必要性が示された。具体的な要因としては、意欲向上要因として<理想モデルの存在>や、そのモデルとしての面も持つ<友人> <先輩>, <実際使用場面での経験>などが抽出された。意欲低下要因としては教育文脈に関係した局面における<宿題の多さ>や<学習内容の難しさ>など、ワークロードに関係する要因が顕著に現れた。これらの要因は学習環境および社会文化的文脈の影響を受けたものであり、学習意欲は学習者を取り巻く状況と切り離しては捉えられないことが明らかになった。

次に、抽出された要因に沿って、L2-MSS を枠組みとしてインタビューデータを分析した。その結果、それらの要因は Ideal L2 Self (なりたい L2 自己) および Ought-to L2 Self (なるべき L2 自己) の形成や維持に結びつく意欲向上を、挫折や維持の困難さにつながると意欲低下をもたらすことが明らかになった。しかし、それぞれの要因は常に同じよ

うに作用するわけではなく、文脈により学習意欲に異なる働きかけをするという多義性を持つといえる。これは、L2 Self の形成や維持には、学習者が具体的文脈をどう捉えるか、どのように自己と結びつけるかが関わっているためだと考えられる。

最後に、調査の分析考察結果を踏まえ、L2-MSS を土台として、P 大学の文脈における学習意欲を高めるストラテジーを 5 つ提案した。これらのストラテジーは、日本語学習と教室内外での実際使用が有機的に繋がるような活動設計と、学習者が自身の日本語学習や実際使用へ主体的に関与しながら L2 Self を形成・達成・維持できるように支援することの両方を含む。教師ができることは、学習者が意欲を高めることができるような環境を学習者と共に作り、意欲の向上・維持を支援していくことといえる。

本研究では、学習意欲に影響する要因は社会文化的文脈と不可分であること、それらの要因は学習者の L2 Self の形成や維持に作用して意欲の変化をもたらすことを明らかにした。その結果から提案した意欲向上ストラテジーは、教師の支援と学習者の主体的関与の双方を含むものであり、学習意欲に関わる教師の役割の一端を示した。その一方で、対象を限定しているため、今後は異なる社会文化的文脈や、学習を止めてしまった学習者などにも対象を広げた研究の蓄積が望まれる。また、本研究のデータは協力者の自己申告に基づくもののみであった。今後は複数の手法を組み合わせデータを得、学習者行動の観察や担当教師からの報告なども含め複眼的に解釈し、考察を深めたい。加えて、提案したストラテジーの実践と検討、学習者が用いる Self-motivating strategy の提案も今後の課題としたい。

主要参考文献

- 磯田貴道 (2005) 「学習意欲や動機づけに関する概念の整理へ向けて」『広島外国語教育研究』第8号, 85-96.
- 今福宏次 (2011) 「教室内学習場面における日本語学習意欲の変化—学習意欲を高め自律学習を促す教師の役割—」『淡江日本論叢』第23号, 185-204.
- 岩本尚希 (2010) 「外国語学習者の学習継続要因に関する一考察—言語学習ヒストリーから—」『桜美林言語教育論叢』第6号, 29-43.
- 小西正恵 (2006) 「動機・態度」津田塾大学言語文化研究所 言語学習の個別性研究グループ (編) 『第二言語学習と個別性 —ことばを学ぶ一人ひとりを理解する—』第二部Ⅱ-3, 春風社, pp. 92-108.
- 桜井茂男 (1997) 『学習意欲の心理学—自ら学ぶ子供を育てる』誠信書房
- 西口光一 (編著) (2005) 『文化と歴史の中の学習と学習者—日本語教育における社会文化的パースペクティブ—』凡人社
- 西部由佳 (2009) 「教室内外での出来事による学習者の『学習意欲』の変動とその背景となる心理的要因—『可能性の予期』に注目して—」『小出記念日本語教育研究会論文集』第17号, 21-32.
- 林さと子 (2006) 「第二言語習得研究から見た第二言語学習／習得の個別性」津田塾大学言語文化研究所 言語学習の個別性研究グループ (編) 『第二言語学習と個別性 —ことばを学ぶ一人ひとりを理解する—』第二部Ⅰ, 春風社, pp. 48-58.
- 文野峯子 (1999) 「学習過程における動機づけの縦断的研究—インタビュー資料の複眼的解釈から明らかになるもの—」『人間と環境—人間環境学研究所研究報告—』第3号, 35-45.
- 守谷智美 (2002) 「第二言語教育における動機づけの研究動向—第二言語としての日本語の動機づけ研究を焦点として—」『言語文化と日本語教育』2002年5月特集号, 315-329.
- 八島智子 (2004) 『外国語コミュニケーションの情意と動機 —研究と教育の視点—』関西大学出版部
- 羅暁勤 (2005) 「学習者のモチベーションを研究する」西口光一 (編著) 『文化と歴史の中の学習と学習者—日本語教育における社会文化的パースペクティブ—』第9章, 凡人社, pp. 189-211.
- Dörnyei, Z. (2001a) *Motivational strategies in the language classroom*. Cambridge: Cambridge University Press. [米山朝二・関昭典 訳(2005) 『動機づけを高める英語指導ストラテジー35』大修館書店]
- Dörnyei, Z. (2001b) *Teaching and researching motivation (First Edition)*. Harlow: Longman
- Dörnyei, Z. (2009) The L2 motivational self system. In Z. Dörnyei, & E. Ushioda (Eds.), *Motivation, language identity and the L2 self*. Bristol: Multilingual Matters. pp. 9-42.
- Shoaib, A. & Dörnyei, Z. (2004) Affect in lifelong learning: Exploring L2 motivation as a dynamic process. In P. Benson, & D. Nunan (Eds.), *Learners' Stories: Difference and diversity in language learning*. Cambridge: Cambridge University Press. pp. 22-41.